

木の目草の芽

2016年6月22日
公益社団法人
日本山岳会
自然保護委員会
TEL:03-3261-4433

年間購読料 1,000 円
申込: 047-463-8721
syuaki@pony.ocn.ne.jp
郵便番号00180-4-710688
加入者名: 川口章子

自然保護全国集会、高知県立牧野植物で開催

実行委員長 下野 綾子

二〇一六年度自然保護全国集会は高知県

立牧野植物の共催で、「どうする！山の野生動物との関わり」と題して、高知県立牧野植物園で開催されます。

牧野富太郎博士は、日本植物分類学の基礎を築いた一人として知られています。博士の著した植物図鑑の植物画の美しさ、正確さ、繊細さに心を動かされた人も少なくないでしょう。植物生態学者を志している私にとって、馴染みがあるのは植物図鑑だけではありません。植物の学名を調べるたびに博士の名にも触れることとなります。学名には命名者の名前が付されていますが、博士は一五〇〇種類

以上の植物を命名しているのです。

その博士の業績を顕彰する牧野植物園での開催の年に、実行委員長を仰せつかり身の引き締まる思いです。自然保護委員の皆さんから、全国集会の運営について学びながら取り組んでいます。

この集会のテーマでもある「野生動物との関わり」は、今まさに考えるべき喫緊の課題と言えるでしょう。近年、急増したニホンジカの採食による植生変化が多くの山域で深刻化しています。この個体数増加には、拡大造林や耕作放棄地の増加などの人間活動が大きく寄与したと考えられているのです。二〇一

第122号

全国集会レジュメ号

〈目次〉

- P.1 全国集会高知県で開催
下野 綾子
- P.2 大会プログラム
- P.3 フィールドスタディ
工石山マップ
- P.4 支部報告
- P.20 活動記録

三年のシカの捕獲頭数は四七万頭に及ぶにも関わらず、環境省の予測では、現在の二倍以上捕獲しないと減少しないとされています。

一方で減少が心配されている野生動物も数多くいます。私は昔、高山植物キンロバイを研究材料として調べていた時期があります。その近縁種であるギンロバイを見に四国の剣山を訪ねたことがあります。神社に植栽したものしか見つけることができませんでした。もちろん植物園などでの保存も大切ですが、やはり動植物の生育・生息環境が維持され続け、それらの種がいる本来の場所で行いたいと思います。

この全国集会で野生動物植物との関係を再考し、野生動物植物とうまくつきあう方策を皆で話し合える機会となればと思います。

2016年度
自然保護全国集会プログラム

テーマ:「どうする!山の野生動物との関わり」

7月16日(土) <自然保護全国集会>

会場:高知県立牧野植物園

〒781-8125 高知県高知市五台山 4200-6

電話:088-882-2601

10:00 開場受付

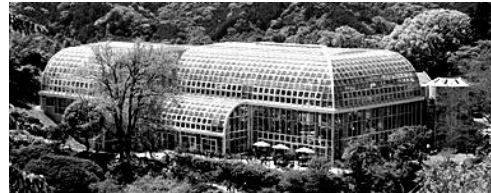
10:45~12:00 支部報告

12:00~12:40 昼食(各自で弁当をご用意ください)

12:45~16:30 日本山岳会 副会長挨拶

共催者挨拶

来賓挨拶



■基調講演「SOS三嶺の自然」

講師:石川愼吾氏 日本山岳会四国支部会員
高知大学理学部教授

■分科会

①「SOS 三嶺の自然」

講師:石川愼吾氏
前田綾子氏 (牧野博物館研究員)

②「四国のツキノワグマは警告する」

講師:NPO 四国自然科学史研究センター研究員

③「山岳植物園 情熱の45年~オアシスの可能性」

講師:山田勲氏(四国支部会員)

④「人間とシカの自然界」

講師:平井滋氏(NPO 法人剣山クラブ)

🚌(全国集会終了後、貸し切りバスで「工石山青少年の家」に移動します)🚌

19:00~21:00 夕食・懇親会

懇親会場・宿泊:工石山青少年の家

〒781-3211 高知県高知市土佐山高川 1898-33

電話:088-895-2016

7月17日(日) <フィールドスタディ:工石山登山・牧野植物園>

Aコース(健脚沢登り)

Bコース(右回り)

Cコース(左回り)

Dコース・・・牧野植物園見学(入園料 720 円)



高知市の北にそびえる工石山（1176m）は、市民にとっても親しまれています。登山道はゆるやかで、ベンチや休憩所が置かれていて、手軽に楽しむことができます。日本で初めて自然休養林として国に指定された森には、樹齢 200 年といわれる天然林がしげり、四季に応じて美しい花が咲いています。野鳥や昆虫も多数棲息し、サイの河原にはサンショウウオもいます。赤良木（あからぎ）トンネル南側の登山口からは約 2 時間で山頂に着くことができ、頂上の展望台からは、太平洋はもとより、石鎚山から剣山（つるぎさん）まで、四国の主な山々を見ることができます。

※工石山登山に関する上記情報は

日本山岳会親子登山サイト (<http://www.jac.or.jp/oyako/>)

から転載させていただいています。

〈支部報告〉

支部自然保護委員他から寄せられた活動報告・近況報告を紹介します。大会当日はこの資料に沿って順番に発表していただきます。なお、当日飛び込みの支部報告は後日、報告号に掲載させていただきます。

■北海道支部

藤木 俊三

北海道支部自然保護委員会の活動の大きな柱は大雪山系・十勝連峰の高山植物盗掘防止パトロールです。北海道庁の委託を受けて実施している公益事業で、支部の中では通称「花パト」と呼ばれています。毎年会員・会友30名前後を事前にパトロール員として登録し、山岳保険に加入の上、1人3回以上、十勝岳、東大雪も含む大雪山国立公園内の夏山登山道で盗掘の監視を行います。パトロールの際は、道庁から貸与された腕章を着用することになっています。単に盗掘や踏み荒らしの監視だけではなく、高山植物の開花や結実状況の報告もします。また、最近問題になっているエゾシカによる高山植物の食害やセイヨウオオマルハナ

バチの高山帯への侵入などもチェックし、目撃した場合は数や場所を報告することになっていきます。2015年度のパトロール期間は6月1日から10月10日まで、26名のパトロール員が延べ123日のパトロールを実施しました。また、昨年から十勝連峰の美瑛富士避難小屋に仮設のテント式の携帯トイレブースが夏山シーズンだけ設置されることになりました。このトイレブースのメンテナンスのため当支部をはじめとする北海道内の山岳9団体が連絡会を作り、当番制で点検・清掃を実施しました。北海道支部は7月20日(月)が当番日で会員・会友5名が参加して点検・清掃作業を行いました。このほか他の自然保護団体との連携事業としては支笏湖復興の森づくりの下草刈り作業に6月20日(土)に会員・会友10名が参加しています。

■青森支部

江利山 寛知

1999年9月に行われた第一回作業から長年にわたり実施されて来た世界自然遺産白神山地におけるブナ林再生事業は今年度も行われる予定です。(会報「山」4月号

No.851)

見事なまで皆伐された櫛石山へ続く奥赤石川林道周辺の遺産地域とのバッファゾーンの斜面を以前の様な自然的原生林に再生することを目的に行われて来ました。主な作業内容は生育不全なスギの撤去やブナ苗木の植林、それに苗木保護のための下草刈りなどです。同時に遺産地域内の自然ブナ林の観察会も行われています。植林されたブナも大きく成長して、けっして広いエリアではありませんが確実にその成果が見られます。しかし、これからの活動については問題も抱えています。日本山岳会各支部にもいえることでしょうかが会員の高齢化、それに伴う参加人員の減少などです。事業のやり方や在り方について一考の必要がありそうです。

今年から8月11日が「山の日」に制定され国民の休日になりました。青森県は山、海共に自然が豊かな地域です。この地を訪れて楽しんでいただければと思います。

■宮城支部

柴崎 徹

1. 宮城のホンシユウジカの動向

宮城県で野生シカが生息するのは、北上山地の南端部の金華山と牡鹿半島である。奥羽山脈など、これ以外では生息の確認がない。

金華山島は、周囲24km、面積959haの小さな島だが、ここに標高444.9m(地震後かなりの変化が起こっているが)の高さをもつ無双峰が聳え、いわゆる島山島になっており、低い部海岸地帯はアカマツ、クロマツ林、中腹はモミ、イヌブナ林、そして山頂部はブナ林となっており、原生的自然が残されてきたが、シカの採食によって、草本層や低木層などが大きな影響を受け、本来の原生自然林の姿はそこなわれている。

これは島全体が、黄金山神社の所有林となっていて、シカも神鹿として保護されてきたからであるが、小さな有限の金華山では、生息数の増加が生態系を損なう大きな要因になっており、これまで、防護柵や防護柵、さらに捕獲などの対策が講ぜられてきた。

一方、牡鹿半島でも、シカは確実に生息数を増やしてきており、分布域も北上山地に沿って北に広がる予兆を示している。ここでは、支部会員の登山を通じて得たシカのデータをもとに、分布域について報告する。



神鹿と猿 左：安芸の宮島（張子）
右：奥州金華山（土鈴）

2. 阿武隈山地の放射線量調査

宮城県の山々の放射線量調査によって、原発事故による県南部地域に高い線量を示す地域が認められたことから、その南に広がる阿武隈山地への関心が高まり、引き続

き宮城、福島、茨城に亘る阿武隈山地全域の放射線量調査を進めることにした。昨年9月にはじまった調査は、本年4月まで42回を数え、130座、320地点ほどを調べることができた。これらの調査結果を踏まえ、現時点での阿武隈山地の放射線量の概要を報告する。

■福島支部

高田 雅雄

福島県は東日本大震災と原子力発電所のダブル災害にあい、もう5年が過ぎました。津波と放射能汚染、ふくしまからはじめよしの合言葉で復興に取り組んで来ています。避難制限地域も徐々に解除されて避難していた住民が少しずつ故郷へ戻ってきています。ただ県内各地には除染で出た汚染土壌などを一時保管する中間貯蔵施設が遅れて、搬出の出来ないフレコンパックが仮置き場に積まれている状況です。

今年は熊本震災で甚大な被害が発生し、熊本のシンボル熊本城の石垣が崩れ無残な姿を見ました。当白河市にも文化財のお城があり東日本大震災で石垣が崩れ現在復旧の最中です。熊本市へ白河の石垣復旧のノ

ウハウを案内しているところですよ。

また原発事故が発生した年から県内山岳の放射線量測定を行って来ました。調査5年を経過し山岳地域の放射線量は着実に減少しています。今後も測定は継続していきます。

支部創立70周年を迎えるにあたり記念事業を計画し記念登山として男鹿岳、飯豊連峰縦走、ニッ箭山、また調査として創立35周年時に寄贈した鐘の現状を調査、記念誌の発行、これらを計画して現在実行中です。今年はクマの目撃情報は昨年より倍、鹿による樹木皮剥ぎも多く見られるようになりました。

■茨城支部

堀内 孝雄

100回を超えた高齢者クラブの自然観察会 高齢者クラブで自然観察会を行っている自然観察会のことを記してみます。私は高齢者クラブの会長を引き受けて、高齢者の方々が、楽しく行事に参加できて、クラブ活動が活発に続くためには、クラブの中にいる多くの趣味や特技を持つ人に部会活動の中心になってもらい、部会活動を高

齢者クラブ活動の基本にすればいいと思部会活動の設立を提案しました。まず、自身が自然ウォッチングクラブを作ることとし、部会員募集をしました。その結果、囲碁・将棋部会、ゴルフ部会、踊り部会、カラオケ部会、男の食彩部会、スポーツ部会など10部会が設立されることになりました。私たちの高齢者クラブは、枝川楽遊会と言いつつ平成14年8月に創立したもので私が初代会長に就いていました。私が部会として設立した自然ウォッチングクラブは、高齢者クラブ創立の翌月9月には部会活動を開始し、第1回の例会を開催しました。自然ウォッチングクラブの部会員は枝川楽遊会113人のうち、半数の50人以上の人たちが入会してくれました。こうして立ち上げた自然ウォッチングクラブ（自然観察部会）は自然観察を中心にして、山歩き、森歩き、ハイキング、森林浴、森林植物観察、野鳥観察などを楽しむこととし、年間に8〜10回程度観察会を開催することとしてスタートしました。思い起こせば、こうした自然観察会も早くも10年も過ぎ開催した観察会は100回を超えることになりました。初めの頃は、県内の自然体験活

動適地と選定された山や森林公園、自然公園を対象として観察会を行ってききましたが次第に上高地、霧ヶ峰、志賀高原、奥日光、裏磐梯などの名所を対象とするようになりました。日本山岳会が国民の祝日としての山の日制定の運動を始めると私も自然観察会の際にこの運動の趣旨などを多くの人に理解されるようにお話ししてきました。私は高齢者の皆さんにも日本の山岳景観の美しさ、見事なこと、山地や森林の大切さ、重要性を子供さんやお孫さんなど家族の人たちに伝えてほしいとお話しています。永く風雪に耐えてきた巨樹・銘木は昔から神の鎮座するもの、場所として日本人に尊崇されてきたものや場所です。国民の祝日「山の日」制定の初年度、このことに思いを致し自然観察を楽しみたいと思います。

高齢者クラブでの自然観察会は東京都内の植物園や公園でもよく開催しました。明治神宮の森をはじめ東大附属小石川植物園、新宿御苑、小石川後樂園、六義園など便利な自然観察の適地が都内にありますので電車利用でよく出かけます。

私たちの自然観察会には、毎回25名ほどの参加者がありません。高齢の方々ですが、

これまで、ケガや病気になる人もなく無事例会を重ねることができました。これまでの参加者にお礼申し上げたいと思います。

■ 栃木支部

石澤 好文

本支部の自然保護委員会は、委員長以下3名の自然保護委員会を中心に活動しています。主な活動として、昨年度と同様栃木県

山岳連盟との共催事業である『日光清掃登山』及び栃木県山岳連盟、栃木県勤労者山岳連盟との共催事業である『那須クリーンキャンペーン&清掃登山』の二事業を実施しました。この二事業は、平成23年度から山の日制定プロジェクトの一環として取り組み、今年8月11日が国民の祝日となったもののまだまだ「山の日」が一般の方に知られておりません。そこで、「山の日」の普及と啓発活動を兼ねて実施しました。平成27年度のこれらの二事業について報告します。

1. 日光清掃登山

7月4日(土)午後5時より清掃登山に先立ち、支部会員5名、岳連等参加者約20名が参加し、栃木県山岳連盟自然保護委員

会主催の前夜祭が、湯元キャンプ場の炊事場を中心に行われました。会場では、参加者がそれぞれ料理や飲み物を持ち寄り、また、各方面からの差し入れなどもあり盛大に開催されました。例年に比べ少人数ではありましたが、その分、山仲間としての親睦や絆を深めることができ、なごやかに各団体の垣根を越えての交流が奥日光の静かな夜のなかで図られました。

翌7月5日(日)、清掃登山当日には、明け方まで激しく降っていた雨も上がり、梅雨の合間の晴天に恵まれ、約200名の参加のもと、朝7時30分に湯元のビクターセンター前広場での開会行事がありました。開会行事終了後、各会に分かれての活動となり、本支部では、昨年と同様に前白根山と五色山を経由するコースに向けて、会員4名と一般参加者4名の8名のパーティーで湯元を出発しました。外山尾根経由で前白根山頂に登り、五色山経由で中ツ曾根尾根を下り14時湯元に到着し、回収したゴミを分別し湯の湖レストハウスに出し、清掃登山を終了しました。登山道では回収するゴミも本当に僅かで、最近の登山者のマナー向上を実感することができました。

2. 那須クリーンキャンペーン&清掃登山

9月6日(土)に開催された前夜祭には、支部会員2名、岳連等参加者約36名が参加し、小雨の中17時より懇親会が開催され、17時30分まで親睦を深めました。

9月7日(日)、昭和55年から那須岳地域の美化を目的に毎年開催されている第38回那須クリーンキャンペーン&清掃登山が開催された。7時30分から峠の茶屋駐車場に参加者184名(内支部会員約8名)が参加して開会式が行われました。今回は新たな企画として、茶臼岳山頂付近の登山道整備を行った。栃木県山岳連盟、栃木県勤労者山岳連盟及び本支部会員20名が山頂直下の登山道で、登山者の路迷いを防ぐためのロープを張る作業に汗を流した。登山道整備のほか従来通り、各会に分かれての登山道の清掃活動、ロープウェイ山麓駅でパンフレットや、登山届の用紙を渡すなどのキャンペーン活動を行い、午後3時にはクリーンキャンペーン&清掃登山等全ての活動を終了しました。

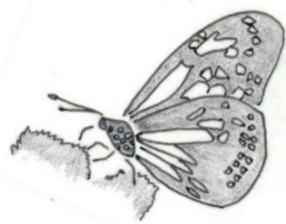
■群馬支部

北原 秀介

群馬支部は、田中壯佑（現支部長）、八木原昭（現日本山岳協会会長）を中心に9名の発起人のリードのもとに32番目の支部として平成25年7月13日に最少人数の20名で設立（現在の会員数は40名）されました。谷川岳を筆頭に数々の名峰に囲まれているにも係わらず、日本山岳会の会員が少なかった理由として群馬県山岳連盟や勤労者山岳連盟が活発な活動を行っており、日本山岳会としての支部の必要性が求められなかったことが挙げられると思われ、支部創設からまもなく3年を経ようとしています。現在まで自然保護活動については独自のイベントは行っておりません。支部自然保護委員として県山岳連盟の自然観察会に参加していますが、4年目にしてようやく企画に漕ぎ着けようとしています。最初のイベントとして、生態学の専門家が支部会員として在籍されることから、親子登山を兼ねて谷川岳の自然観察会を今秋に計画することになっています。

群馬県は、本年4月に県内の山岳において登山者が快適に登山を行うため、安全登

山、遭難防止対策等の連絡調整を行い計画的な事業を実行することを目的として、日本山岳会群馬支部、県山岳連盟、県勤労者山岳連盟の3団体で「群馬県山岳団体連絡協議会」を設立いたしました。今後は、この連絡協議会を通して自然保護活動を共同で行えるよう進めたいとも考えております。また、県内には、シラネアオイの群生地を保護する企業や、尾瀬の自然を守る会あるいは蛍の生息地の環境保護に努める町村など、積極的に自然保護に取り組む団体が多くあります。したがって、群馬支部自然保護委員としては、日本山岳会の支部としての活動に限定されることなく自然保護活動に積極的に参加する方針であります。



■埼玉支部

高嶋 徳紘

年間活動計画第三段

第1回森づくり&自然観察会 5月22日（日）快晴の下、狭山丘陵・緑の森博物館周辺で3年前、小学生が植えた、コナラの幼木を守るため、下草刈りを、当委員会5名、森林サポータークラブ5名（女性2名）で野鳥らにトリ囲まれて午前8時30分〜11時、実施した。邪魔な山菜が山ほどあった。（前後の様子の写真：次ページ上2枚）

午後1時〜2時、埼玉県みどり自然課主催の「体験」里山の活用（サツマイモの植付け）を一般公募に交じり15名で茎の植付けを実施、約100本はあっという間であった。

近所のお子さん連れも加わってなごやかなイベントであった。（写真：次ページ下2枚）10月の収穫祭が待たれる。

（尚、サツマイモの芋は、根である旨の説明があった）



■千葉支部

鈴木 美代

千葉支部の自然保護活動のスローガンは「まずは知ること」である。これに則って、発足以来自然観察をメインに活動してきた。また、講演会を適宜行っている。これには千葉県立博物館など、外部機関との連携も試みている。

2015年度は、11月15日、千葉県銚子市、銚子ジオパークの観察会を実施した。当日は、本部の自然保護委員会の川口章子委員長はじめ、10名が参加。地元の、ジオパーク推進市民の会のボランティアガイドの方々にご案内いただき、有意義な観察会が実施できた。

一方、継続的なテーマを持った自然保護活動はまだ緒に就いておらず、今後の検討課題である。また、自然保護活動を委員会組織とする方針は、参加者が集まらず、進んでいないのが現状だ。どのようにすれば多くの会員・会友に興味を持っていただけなのか、模索が続いている。

千葉県は、温暖な気候と、まれに見る平坦な地形のため、古代より多くの人が居住してきた。このため、原生の自然というも

のはあまり存在しない。従って県内の自然保護は里山保全を中心とした活動が主体となっている。このような活動を行う団体は多数存在する。しかしここにも、宅地化の圧力が強まっており、昨年から今年にかけて、直接知るだけでも3か所の市街地近接林が宅地開発されている。こういった場所を活動拠点とする団体との連携も必要になるかもしれない。

■東京多摩支部

河野 悠二

東京多摩支部・自然保護委員会の委員は担当幹事1名を含め22名(男性16名、女性6名)である。

主な活動内容は次の通りである。

☆他団体との協力、参加活動

- ・都岳連・自然保護委員会の御前山カタクリパトロール参加…4月中下旬の約5日間(保護柵の設置、頂上でのトイレテント設置と携帯トイレ販売、カタクリ保護の啓蒙活動・冊子配布)
- ・都レンジャー(サポートレンジャーを含む)との協働作業

雲取山石尾根登山道整備(石積みで登

山道の複線化防止による植生保護、2015年5月(1泊2日)、6名参加)

- ・全国水環境マップ実行委員会による「身近な水環境の全国一斉調査」に参加(毎年6月上旬に多摩川と秋川の合流地点3ヶ所で実施)

☆ボランティア活動

- ・アツモリソウ保護活動(毎年6月に1泊2日で実施)
- ・国立市立第四小学校、高尾山ハイキングに協力・支援(年1回実施)

☆観察会などの実施

- ・御岳山レンジショウマ観察会(毎年8月、一般募集、参加者約30名)
- ・高尾山シモバシラ観察会(毎年12〜1月、一般募集、参加者約20名)
- ・親子自然体験(2015年10月、一般参加者4家族11名参加、ピザ作り、弓矢作りなど)

☆自然保護講演会

- ・自然保護に関する講演会を開催(毎年11月頃に実施、会員参加者約30名)

☆自然保護委員会

- ・月1回委員会を開催

■越後支部

吉田 理一

越後支部の活動としては支部主催の親睦登山、高頭祭での弥彦山登山、公募登山等におけるゴミ拾いが主たる活動であり、自然保護に関する講演会や啓蒙活動等の積極的な活動は行われていないのが実情です。

ここ数年実施していた3月末の弥彦山における雪割草パトロールは今年も全国支部懇談会が4月第一週に計画されていたため実施しませんでした。

私個人が拘っている活動について記してみます。東京都文京区では文京区立の全小学校20校の6年生全員約1300人を対象に「尾瀬学習」を数年前から実施しています。私も尾瀬ガイド協会認定自然ガイドとして毎年数校のガイドを担当しています。「自然保護運動の原点」といわれる尾瀬での環境学習は児童たちに自然保護の大切さを実際体験を通して理解してもらおうことで大変有意義な行事です。尾瀬の自然を守ってきた長蔵小屋3代のお墓がある「ヤナギランの丘」、トイレがチップ制である理由、木道の維持管理、ゴミの持ち帰り、石けん・シャンプー・歯磨き粉の利用自粛等の不便

さを体験を通して感じてもらう事で自然保護の大変さ・大切さを考えてもらうようガイド活動をしています。

■富山支部

河合 義則

富山県での山岳、自然に関する各種団体の中で、その構成メンバーは重複して活動を行っており、日本山岳会富山支部の構成メンバーは山の愛好家が多数を占めており最近では、自然保護関係の活動を行っているメンバーも少し増えてきているといった状況です。

昨年からは、地域の低山において、一般募集による例会山行を実施し、そのなかで地域の自然について解説を交えながらの普及活動も行っています。

富山県の実施する立山・黒部のフィールド調査に富山支部のメンバーが要請を受けて参加したり、富山県山岳連盟の主催する市民登山や県民登山にリーダーとして参加しています。

このように、各団体の活動に積極的に講師やリーダーとして要請を受けて活動するという事例が多くて、残念ながら富山支部

の主催する独自の自然保護活動までなかなかできていないという状況があります。

富山支部は、富山県における多岐にわたる自然関連行事に人材を派遣しているという性格がよく、支部独自の自然保護活動の単度実施が難しいが、各山行の中で、自然を知りその変化を察知し、どのような対応が必要かの経験からの意識醸成は確実に高まってきています。

最近の話題では、昨年から、再び環境省においてライチョウの低地飼育がはじまり、上野動物園と富山市ファミリパークで、各5個の卵の人口孵化試験がはじまりました。上野動物園では残念ながら5個とも死んでしまいましたが、ファミリパークではオス3羽が今も生きています。

平成28年度は、この二つの動物園に加え、日本で最初に低地飼育を行った実績のある長野県大町山岳博物館を加えた3か所で低地飼育を行うこととしています。

ライチョウに関するフィールド観察は昭和40年代より立山において行われており、フィールド調査メンバーには富山支部会員も含まれています。

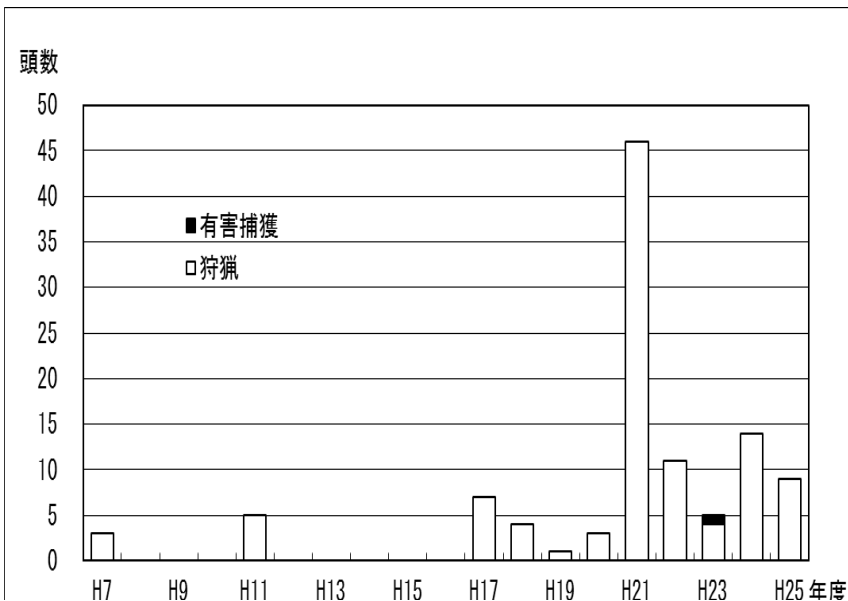
■石川支部

埴崎 滋

奥能登の輪島市門前町に位置する猿山岬（標高332・30m）は日本海の断崖に面したユキワリソウの群生地知られる。また、能登麦屋節の里ともされる。白亜の現役灯台から3kmの遊歩道の途次に「娑婆捨峠」がある。案内板に「猿山にはシカとサルが棲息多く、猟師に追われて進退窮まったシカは200mの断崖を飛び下りるしか術がなかった。シカの娑婆捨でありますが、危険ですので人間も注意してください」とある。現代ではシカもサルも全く棲息してはいないが、Ⅱ歴史は繰り返すⅡで県南・県東から侵入・北進で目撃情報が北上進行中で、ここ数年の内にも彼の地で往時の史実の再現でその姿が見られるように為るやもしれない。一部の報道で石川県側で県境を接する25kmに亘ってシカの侵入を防ぐ柵の設置が検討と報ぜられ、自然界に境はあり得ないし、単なるエゴ防衛としては問題として、計画遂行はタナ上げ状況ではある。里山地域の過疎・放棄・荒廃の進行でシカ、クマ、イノシシ、サル等の野生獣との棲み分け・闘ぎあいは切迫のライ

フテーマで追っかけてきており、当然のこととしての農林産業への彼らによる被害は増加の一途となっている。当石川県としては深刻化するニホンジカ、ツキノワグマ、イノシシ、ニホンザルの夫々管理計画を策定し関係機関が民間団体と協調して計画に基づいた活動を遂行している。ニホンジカについては年間捕獲総数は、推定棲息頭数の12%以内としている。計画年度は5か年周期での計画の見直し改定も行う。保護地域・緩衝地域・排除地域に区分され被害防除及び個体数調整を中心に実施と排除に努めるとする。シカ、イノシシ、クマの県内への侵入・定着による被害の対応策の一端として、食材（ジビエ）として幅広く利、活用することができればと、飲食業団体、消費者団体、猟友会等と図って「石川県野生獣肉の衛生管理及び品質確保に関するガイドライン」を策定して啓蒙と拡充を進めるとしている。内容は①作業工程ごとの衛生管理、品質確保（捕獲者・処理業者）②流通に必要な表示内容③食品のトレーサビリティ④イノシシ・ニホンジカ肉の調理における安全確保がある。県下での生息数の推計はニホンジカで約2800頭、ツ

キノワグマで約800頭、イノシシでは精緻な実数データがなく平成25年度の捕獲は2684頭に上り（H20年度1013頭）県下全域に亘ってきている。ニホンザルについては暫増傾向で白山地域を中心に30群約1200頭（内ハナレザル30頭）とみられる。別図として「ニホンジカの経年捕獲状況」を掲げる。



■山梨支部

磯野 澄也

・山岳レインジャー活動

全国に先駆け山梨の高山帯の自然保護活動を目的に、30年を超える山岳レインジャー活動が今年も始動した。本年度は山梨県山岳連盟加盟の20団体151名が登録、5月から9月までの間、希少野生動物植物種の生育調査活動がほぼ毎週延べ300名を超えるレインジャーにより展開される。当初は高山植物の保護の条例でパトロール業務が主体であったが、平成20年より希少野生動物植物種の保護に変更、絶滅危惧種18指定種及び準ずる絶滅危惧種の調査活動へと変わった。山梨県内の南アルプス・八ヶ岳・秩父多摩甲斐の国立公園・国定公園、その他の高山帯・亜高山帯が対象になる。

例年、5月に実施割振り表を各会に提示し協力頂いている。この割振りは大変複雑で、得手不得手も考慮し配置している。調査者は規定の調査表に記載、地図・写真を添付しレインジャー責任者に提出する。10月以降反省会を開催、各調査資料を分析し報告書として纏める。これが大変な作業であるが経年ごとに貴重なデータとなって記

録されている。

・高山植物啓蒙活動

これらに先立ち実施要領を作成し、本年はレインジャー研修会を2回開催、延べ70名が受講した。更に委員会による現地学習会を実施、既に30回を超え昨年は5回延べ95名が参加した。うち2回は一般登山教室を兼ね高山植物の啓蒙活動を行った。本年も学習会は各種希少種を対象に4回を予定している。委員会を担当して14年になるが以前は花に全く無知であった。しかし委員会には大変詳しいメンバーが多数おり教えて頂いた。山梨では年を重ねると高山植物に親しむ登山者が増加し、知識向上から花目的の山行も大変多くなった。

・自然保護活動

レインジャー業務から浮彫りになることは、地球温暖化による環境変化が見える。平成18年頃から二ホンジカの高山帯進出により、高山植物食害による裸地化及び植生変化は著しい。また近年の激しい気象変化(降水量・気温・日照時間)により毎年、開花時期が左右されている。年間の平均気温と連動しており、自然環境への影響をより注視していくべきと考える。

その他の活動として山岳トイレ整備に対し登山者立場からの支援を行い、幾つかの成果が上がっている。登山者増加に対し快適な環境づくりに協力したい。また維持管理費に対し曖昧なチップ制は取りやめ小銭持つよう世論を喚起し広報すべきと考える。

・里山の自然に親しむ

近年、年代を超え健康志向のため自然を親しむ人が増加している。里山の低山はより底辺を広げれば、年代を問わず幅広い登山人口が増加する。下部温泉近くの醍醐山は634mで東京スカイツリー開業と共に山のスカイツリー・山と温泉として世に売り出した。里山の荒れ果てた登山道は100人のボランティアで復活、標高差400mの山は誰でも気軽に登山できる。醍醐山を愛する会を立ち上げ過疎の町に明るい話題を提供している。醍醐山ブログで発信中。

■信濃支部

平林 節生

自然保護と山歩き

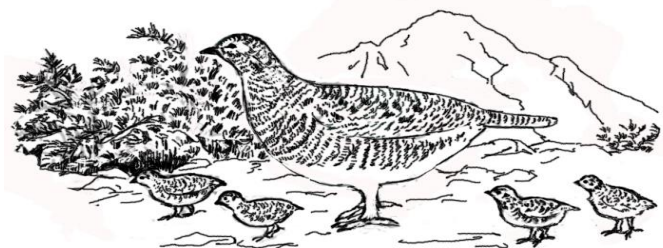
信州は自然に恵まれ高山もあることから自然保護の対象は限りなくあります。まず雷鳥保護に関して、雷鳥の保護は戦

後、大町高校に生物の先生としておられた羽田健三先生(のち信州大学名誉教授、山階芳麿賞第1回受賞者)が先駆者でしょう。この研究者の下に古くは千葉彬司さん平林国男さん等の大町山岳博物館を作った人びと、そして現在、ライチョウ飼育の第一人者宮野典夫氏(前大町山岳博物館館長)、雷鳥研究の第一人者中村浩志氏(信州大学教授)等、皆、羽田先生の弟子ともいえる人々です。ライチョウは飼育が非常に難しく大町高では昭和25年頃から始まっていたのではないか。昭和36年山博物館運営委員会が始まって山岳博物館の建設の一方、ライチョウ調査が始まり5月10日から10月7日連続150日の調査を行った。このころの雷鳥個体数3500羽は確立された。現在の雷鳥数は1500羽と減少しています。山で採卵されたライチョウの卵がふ化に成功したがその後、上野動物園、立山でも育たなかったのはやはり気候、経験の不足があるのではないかと思っています。大町山岳博物館では宮野研究員が中心に平成27年「ライチョウの里」の再出発としてライチョウ舎が完成、スバルバルライチョウを飼育して技術習得をしたのちライチョウ

飼育に本格的に取り組む準備を進めてい
ます。又、長野県環境自然保護課ではライチ
ョウサポーターズ制度を設け一回目の募集
を完了しそのメンバーに私も加えていただ
き、これから始まる学習、事業に取り組ん
でゆく覚悟です。平成28年6月12日大町山
岳博物館において雷鳥サポーターズ養成講
座が開かれサポーターズの二回目の募集が
行われ、7月1日から7月2日にかけて燕
岳で雷鳥観察と生態の学習が開催されま
す。サポーターズは雷鳥に関する保護活動は勿
論、山を歩いている時の雷鳥に関するいろ
いろな情報を県に伝えることを旨として、
情報の共有化を図るものです。

雷鳥を里で発見した記録を先の宮野典夫
さんが報告しています、「里に下りたライチ
ョウ」と題して「新北アルプス博物誌」大
町山岳博物館編2001年10月25日発行。
その中で里で発見されたライチョウは記録
が二例ある。一つ目は1966年（昭和42
年11月3日）大町市平二つ屋（標高825
m）オスの雷鳥で、素囊内にホワイトクロ
ーバー、イブキジャコウソウ、ハイイヌツ
ゲの葉等平地産の植物が見られこのことか
ら、鹿島川の河川にある期間生活していた。

二つ目は1998年（昭和63年）3月17日
大町市平野口（標高780m）10時ころカ
ラマツの根元にいるところを発見、250
mくらいには人家や県道が通っている。と
報告しています。北アルプスの近くに住ん
でいる我々でなければ気付かないことで、
非常に重要な発見、もしかしたらライチョ
ウの生態に重要にかかわる観察かもしれな
いのです。「冬の雷鳥は里山で生活してい
るかもしれない」と。地元でなければ観察で
きない部分を確り観察するのが我々の任
務かもしれないと思います。熊についても26
年、里に多数の熊が出没し、一日の中で実
況放送が出来るほどでした。これも大町市
の爺ヶ岳スキー場周辺の熊棚の調査をし
ましたが、リフトから見える範囲で120個
が確認できました。27年は出没が少なくこ
の、年暮の熊棚はわずか二つ、熊棚の数と
出没には大きな関係がある事がわかりまし
た。これは当たり前のことですが山に食料
が無いと里へ、里山で食糧を得るため熊棚
を作るのです。これからアルプス近くに住
む我々こそでなければできない観察を続け
ることの必要性和重要性を考えるものです。



■静岡支部

白鳥 勝治

自然観察山行…大井川源流域のリニア中央
新幹線予定ルートを歩く

昨年の9月19日より4日間かけて、JR
東海がリニア新幹線のトンネル工事によっ
て、河川の流量が毎秒2トンの減水が予測
されると発表した、大井川源流域の西俣か
ら小西俣を主対象として、大島支部長と県
山岳連盟の滝田会長の3人で観察しながら

歩いた。

南アルプスにおけるリニア新幹線の予定ルートは、地下深く転付峠の北側で山梨県との静岡県境を越え、大井川源流域の二軒小屋の北側で東俣を横切り、西俣から小西俣を経て小河内岳付近で長野県の大鹿村へ抜ける総延長長さ22kmのトンネルである。

この辺りには、明治時代の初期に開削された山路で、新倉から転付峠を越え、二軒小屋から西俣を遡って小西俣との分岐点通称、慣合を経て三伏峠を越え、御所平を経て大鹿村釜沢へ通ずる甲斐・信濃の往還路があった。しかし、今日では殆どが廃道になっている。

今回の観察行は、まだトンネル工事が始まっていない西俣と、人工建造物が全くない美しい渓谷の小西俣の現状を確かめるために訪れた。初日は二軒小屋で幕営、2日目より歩く。

西俣は二軒小屋から始まり、北西へ向かって6kmにある小西俣の分岐点慣合までは、平成7年に完成した発電所の取水堰堤の建設時に車道を開削したが、現在は崩落して途中の発電所迄でしか行けない。発電所からは、かすかに残る古い山路を辿るか川を

遡行する。二軒小屋から慣合の間は川幅が広く、崩落した車道や前後が切れて通れないコンクリートの橋などが残っており、出水時の凄まじさを物語っている。リニアの工事計画によれば、この間にトンネル掘削土360万³mを排出する工事用の出入り口が出来ることになっている。

慣合から流れの向きが南西に変わる小西俣へ入ると、水量は豊富だが川幅は狭まり、兩岸の自然があまり壊されずに連なって渓谷の美しさが維持されているように思えた。

小西俣には顕著な滝はないが、右岸の小石岳から落ちてくる沢には見事な滝が見えた。リニア新幹線の予定ルートは、慣合から小西俣へ入って2kmほどの左岸に小河内岳から注いでいる、岳沢に沿って西へ向かい県境を越えている。しかし、今回の観察行は、更に小西俣を1kmほど遡り魚無沢の出合で幕営した。3日目は氷河遺跡と解明された魚無沢を登って荒川岳避難小屋へ泊り、4日目に悪沢岳を経て二軒小屋へ戻り予定を納めた。

小西俣の渓谷や魚無沢は自然そのものが残っている。山の自然は時に厳しく、時に優しく訪れる人の心を豊にしてくれる。私

達はこの自然を、ありのままの姿で次ぎの世代に引き継ぐ責任があるのではないだろうか、と改めて感じた山行であった。

■東海支部

南川 陸夫

東海支部自然保護委員会は支部員、支部友会猿投の森づくりの会員に限らず一般の人にも参加していただき、下記の活動をしています。

平成28年度活動計画

1. 猿投山の自然調査山行を月1回の実施の計画で活動している。現時点の視点として猿投山の各コースを歩き自然保護、安全登山の観点から①案内看板の調査②危険箇所③地質の理解④生物の調査(動物・昆虫・野鳥、植物、キノコ等)⑤植生の調査(巨木、銘木、群生地、外来種の有無)⑥猿投山の歴史(神社、古墳、古窯跡)⑦やまじの森づくりの現状と過去の施行地の現象⑧清掃登山等をしてその都度報告書を作成してまとめに繋げる。

2. 自然観察山行

特徴的な自然生態や自然環境を対象とした「自然観察山行」を毎年実施している。本年度の予定は9月10日～11日、長野県下伊那郡大鹿村地方を訪ねて「リニア新幹線の建設

が南アルプスの自然破壊に与える影響について「学ぶことを計画している。

3. 第20回森の勉強会

例年京都・滋賀支部、関西支部、東海支部の自然保護委員会が共催して開催されている行事であるが、本年度は関西支部が主管となり、11月5日～6日に奈良県桜井市初瀬の長谷寺の寺領与喜山暖帯林、奈良春日神社の神域林内の原生林の観察、勉強会が計画されている。支部員はじめ多数の方に参加を呼びかけて参加する。

4. やまじの森「猿投の森」での

野生動物（哺乳類）の調査

昨年来より定点地を3箇所に固定して、遠赤外線カメラ3台による動物調査を継続実施。

イノシシの増加。シカは単体であるがオス、メスが出現する。アライグマが増加して、サワガニ等が減少した。生態系に影響を与えている。カモシカは変動なく個体数は安定している。

(写真：下段4枚参照)

5. 関連行事等へ参加協力

①「猿投の森づくり」活動 ②「第8回森の音楽祭」 ③HAT-J清掃登山・・・等



■ 関西支部

斧田 一陽

関西支部の自然保護活動は、①「関西支部自然保護委員会」を中心に、大阪府北部の「日本山岳会関西支部本山寺山の森」で、活動主体「本山寺山森林づくりの会」会員による森林づくり活動、②六甲山地東お多福山でのスキ草原復元協働活動、③やまみち巡視保全活動、④森林観察や自然観察

会、④関係機関への協力活動など、構成員や一般にも門戸を広げて活動しています。主な活動内容を報告いたします。

1. 本山寺山森林づくり活動での

ナラ枯れ対策

月2回の定例活動日の活動場所までの往復時間を利用して、隣接する東海自然歩道の水切り溝の枯葉や土砂の除去をして、登山者やハイカーに喜ばれています。歩道沿いのコナラやアカガシのカシノナガキクイムシによる被害防止対策のため、幹に濡れタオルとビニールシートを巻いて経過観察をしています。葉が枯れた木もありましたが、他地域よりも数段に被害が少なく予防効果があったと思われる。通過する登山者からの質問も多く、手を止めて説明に忙しい日もありました。

2. 東お多福山スキ草原復元協働活動

「東お多福山草原保全・再生研究会」は現在9団体で面積も拡大させて、ネザサを刈払いスキ草原への復元を目指して協働活動をしています。関係機関の協力も得て、順調に活動できています。東お多福山ガイド養成講座を開設（行政と共同）したり、古写真の巡回展示会も開催しました。また、

「古写真から紐解く東お多福山草原の移り変わり」を編纂発行しました。登山道保全活動のための調査を関西支部で受持ち、現在調査を続けています。

3. 大台ヶ原の利用に関する協議会

近畿地方環境事務所を中心に、関係者の連携・協働を図る会の構成員として参加しています。西大台利用調整地区の利用申込方法が一部変更になり、利用可能人数に空がある場合は、当日受付が可能になり一部の人には利用しやすくなりました。吉野熊野国立公園は、海岸部地域が大幅に拡大されました。山川海への連携行動が望まれています。

4. 森林体験と自然観察会

わんぱく探検隊を上記本山寺山の森に迎えて、生き生きと森林体験を楽しんでもらいました。奈良県川上村で蝶や蜻蛉の観察会も開催しました。

■広島支部

前垣 壽男

H28年度活動方針

JACは公益法人に認定以降、より公益性の高い活動が求められており、「山の日」

についても、今年から「8月11日が国民の祝日」として施行される。

広島支部独自の活動としては従来通り、分水嶺新道の登山道整備と高岳&聖山の山頂周辺の整備と共に、八幡高原の霧ヶ谷湿原再生地を保全する為の調査・整備に取り組む。

従来から取り組んでいる、ひろしま「山の日」県民の集いやJAC自然保護全国集会等の機会を捉えて、広島支部の活動を他の団体や他支部に対してアピールすると共に、進んだ団体・支部を視察してあり方を勉強する。

H27/7～H28/6の活動実績

1. JAC広島支部 独自事業

- ①中央分水嶺「聖別れ〜匹見ルート」登山道整備 8月29日24名・30日30名参加
- ②高岳の山頂整備 12月5日17名参加
- ③霧ヶ谷湿原再生地の手入れ・環境整備 4月17日雨天中止

2. 第15回ひろしま「山の日」県民の集い行事

- ①北広島会場 霧ヶ谷湿原再生地の手入れ・環境整備、
- ②ツリークライミング、ハイキング指導(北広島会場 臥龍山、東広島会場 龍王山)

3. 西条・山と水の環境機構行事

- ①龍王山 山のグラウンドワーク、②龍王山 水のグラウンドワーク

4. NPO法人 西中国山地自然史研究会 事業

- ①千町原 夏の草刈り、②千町原 秋の草刈り、③雲月山 山焼き、④千町原 春の草刈り

5. 広島県山岳連盟が主催・協力する自然保護関係行事に参加

6. JAC自然保護委員会・森づくり連絡協議会の主催事業

- ①JAC自然保護全国集会に参加
- ②JAC森づくり連絡協議会に参加
- ※ 高尾の森(東京都)体験勉強会 7月8日～11日予定で訪問予定。

■福岡支部

山本 博

オキナグサの保護と復活

福岡と佐賀の県境に基山がある。663年白村江で唐・新羅の連合軍に敗れた日本は、日本への侵攻を恐れ大宰府防衛のため水城や山城を築いた。その一つが基山(414.13m)に築かれ、遺跡は国の特別史跡となっている。頂上

付近は草原で、そこには貴重な草原性の植物がみられる。環境省の絶滅危惧Ⅲ種(VU)に分類されているオキナグサもその一つである。

登山者が多いため保護対策がとられていなかった頃、オキナグサは盗掘や踏み付けで絶滅の危機に立たされていた。登山者の要望で基山町が保護柵を設置したため、一時回復するかにみえたが柵は壊れてその後再び衰退に向かった。

それを見かねた当支部の会員で環境省自然公園指導員の五十嵐賢君は平成24年町の了解を得て、残された自生地に私費を投じて杭を打ちロープを張って保護、回復を図った。しかし、翌年には撤去されていた。このイタチゴッコは繰り返し返されてきた。

平成27年4月、地元の新聞、テレビがこの問題を報道し、さらに季刊山岳雑誌「のぼろ」が取り上げるようになると町が動いて五十嵐会員が作った囲いとダブるようにロープを張って立ち入り禁止区域とした。しかし、その後一番大きな区域を残してほかの柵、囲いなどはすべて撤去されていた。

平成28年早春、五十嵐会員は15か所に囲いを作った。最も大きな群生地(約76平米)の中を登山道は通っているが、囲いのために通れなくなり、その囲いの中でオキナグサは見事に復

活して美しく咲き誇っている。そのほかの囲いは数株単位のものが点在している。

平成27年9月、五十嵐会員は自然公園関係功労者として環境大臣表彰を受けた。福岡支部では平成28年5月7日、現地で自然観察会を行った。頂上台地に上りオキナグサの群生地に出るとほとんどの花は散り、瘦果は白い毛を密生させて3cmほどに伸びた花柱は翁の白髪頭を思わせる状態であった。これが風に乗って飛び散ると育成の範囲はまだ広がるように思われた。基山では絶滅の危機は遠のいたのではないか。しかし、監視、保護のための活動は長く続けねばならない。支部としても五十嵐会員とともに保護活動を続けたいと考えている。

■東九州支部

飯田 勝之

自然保護活動としては、支部が組織的に行う活動と、会員が個人的に行うものとは、坊ガツルや久住高原などの野焼き作業のボランティア参加や、由布岳・鶴見岳山麓にある猪ノ瀬戸湿原の復元作業への参加、自然観察指導員の資格を持つ会員の観察会参加、自然公園指導員に委嘱されている会員の業務などあるが、こ

れらについては個人活動なので、ここでは支部が組織的にやっている3つの活動を報告する。

1. シカの食害とスズタケ枯死の調査

九州山地の自然林荒廃が広範囲で進行し、同時にスズタケが至る所で全滅状態になっているが、これらがシカの繁殖による食害ではないかといわれており、その実態と経過観察を目的として大分県植物研究会と共同作業で実施を開始して4年目に入っている。

本谷山西の標高1400mの稜線上に県が設置した定点観測地点があり、ネットで囲った内側と、その横の地点のスズタケの生育状態の差を調査することや、尾平越から本谷山に至る稜線の樹木の食害状況や、スズタケ枯死の進行状態の観察などがその主な作業で、6月と10月の第1土曜日を定期観測日としており、支部会員7〜9名と同会のメンバー7〜9名がチームを組んで行っている。

2. 清掃登山

毎年10月に九重山坊ガツルのアセビ小屋で支部の合宿を行っているが、その往復で登山道の清掃を行うことを恒例としている。このため、アセビ小屋への入山、下山ルートは毎回変更し、数多い九重山の登山ルートをその都度選んでいる。近年の傾向として、以前のように山

道に空き缶、空き瓶、たばこの吸い殻などのいわゆるゴミ類はかなり少なくなりましたが、山道での落とし物のタオルやバンダナ、手袋、ビニール袋などが多く見られる。また、登山者が勝手に付けたと見られる目印のビニールテープやプラスチック製の無意味な道標などもあり、これらの撤去なども行っている。

3. 大船山のミヤマキリシマ保護活動

国立公園特別保護区内で国の天然記念物に指定されている、大船山山頂付近のミヤマキリシマが、成長するノリウツギやヤシヤブシなどの日陰となって枯死する状況が見られ、環境省の許可を受けてこれら支障木の除去を行う事業が、県の委託を受けて行われており、それらの作業に支部会員を募って参加している。

■宮崎支部

前原 満之

宮崎支部の自然保護活動は、2001年（H13）4月の委員会制度発足を契機に、自然保護委員会の活動として積極的に取り組むことになった。

1. 森づくり活動

登山を通じて自然に親しんでいる我々は、登山行為そのものが自然を傷つけずには成り立た

ないことを痛感する中で、自然に対しなすべき具体的な実践活動として森づくりを始めることになった。

2001年（H13）～2002年（H14）、3カ所に植樹後、毎年6～9月に2回、3月に1回の育林作業を実施している。最後までカヤの繁茂が衰えなかつた田野の森も、ようやくカヤは点在するほど少なくなってきた。今や山には水が湧き出し、春には会員が種から育てた苗木のヤマザクラが咲いている。

①宮崎支部森づくり活動の特徴

宮崎支部の森づくり活動は、自然保護委員会が担当し、会員のみで活動している。支部における一般市民との連携については、自然保護委員長が事務局をしている市民活動団体「水源の森づくりをすすめる市民の会」に団体加入しており、そこでの活動が市民と連携した活動となっている。

②今後の予定

3ヶ所とも下草刈が一段落したので、今後は当面、若干の下草刈と枝打ち徐伐等の育林作業となる。その後については、会員の高齢化もあり、新たにフィールドを確保し、植樹しての森づくりは厳しい状況と思われる。今後は森づくりにとらわれず、自然保護の実践活動をどう取

り進むか検討していきたい。

2. 宮崎自然休養林の登山道点検報告

宮崎森林管理署から当支部に対し、宮崎自然休養林登山道の点検・保全巡視の依頼があり（2002年（H14）徳蘇山系。2011年（H23）双石山系）、随時、会員からの情報に基づき登山道の状況を点検、報告し、森林管理署からも報告に基づく改善結果の状況報告をいただいていた。しかし2016年5月、森林管理署より登山道の管理主管が森林管理署から「宮崎自然休養林保護管理協議会」へ移行したことから、森林管理署としての登山道の点検・保全巡視の依頼は終了したいとの申し出があった。従って今後は窓口が上記協議会になるが、協議会とは他の山岳団体、ボランティアの方々等関わっており、協議会の取り組み状況を見つつ、今後の対応を考えていきたい。

3. 清掃登山

1996年（H8）から毎年12月、双石山、斟鉢山、花切山、青井岳等の清掃登山を実施している。宮崎市街地に近く、多くの人が訪れる山をきれいに保っていきたい。

◇自然保護委員会の活動記録◇

〈三月度〉

①理事会報告 3月9日(水)

- 海外委員会とJAN編集委員会を統合し、国際委員会(委員長:古野淳氏)を新設。
- 「マナスル初登頂60周年および国民の祝日

『山の日』施行記念事業」(7月10日)の説
明会を各委員会に3月29日に行う。

②山岳団体自然環境連絡会報告 2月25日(木)

- 「シカ食害」に関する全国規模のアピール集
会の開催を検討。

③自然保護委員会報告 3月23日(木)

- 自然保護全国集会(四国)について
・4月17日(日)に現地下見に行く。
・(メンバー)下野(綾)実行委員長、山田業
務執行理事、川口委員長、富澤委員、渡邊
委員)会場・宿泊所の視察、グループディ
スカッションのテーマ、懇親会などに関す
る協議等を行う。
- 「マナスル初登頂60周年および国民の祝日

『山の日』施行記念事業」について

- ・展示室に掲示する掲示物の検討をする。
- 自然観察基礎講座・第2回を牧野記念庭園
(練馬区)での開催を検討する。
- 「木の目草の芽」第122号はレジメ号とし

て6月22日(水)に発行予定。第123号は
報告号として8月下旬に発行予定。

④自然保護関連事業への参加報告

- 日本山岳遺産基金主催「第6回日本山岳遺産
サミット」2月27日(土)に川口委員長が
参加。
- 奥利根自然センター主催・第5回「奥利根ニ
ホンジカ問題をどうとらえればいいか」3
月13日(日)に川口委員長、元川委員が参
加。

〈四月度〉

委員会開催に先立ち、京都滋賀支部・自然保
護委員長 酒井展弘氏の逝去(4月10日)の
報に接し、哀悼の意を表し黙祷を捧げる。

①理事会報告 4月13日(水)

- 北海道環境生活部から、知床における携帯
トイレ携行のお願いが届いたため、メルマ
ガに掲載。JACのホームページにも掲載
予定。
- ②山岳団体自然環境連絡会報 3月25日(金)

●シカ食害に関する全国規模のアピール集会
の内容を各団体から募集、4月27日開催
の連絡会で協議する予定。

③自然保護委員会報告 4月21日(木)

●自然保護全国集会(四国)について

・4月17日(日)に行った現地下見。(メ
ンバー)四国支部・尾野支部長、清岡副

支部長、本部:下野(綾)実行委員長、山
田業務執行理事、川口委員長、富澤委員、
渡邊委員)会場・宿泊所の視察、グルー
プディスカッションのテーマ、懇親会な
どに関する協議を行った。

●「マナスル初登頂60周年および国民の祝日
『山の日』施行記念事業」について

・掲示では、自然保護委員会が全国の各支
部にあり、その活動が、調査、自然保護
活動、機関誌の発行など多岐にわたって
いることを紹介することに決定。

●支部委員長の異動について

・北海道支部の委員長が、武田一生氏から
藤木俊三氏へ、富山支部の委員長が、金
尾誠一氏から河合義則氏へ交代した。

〈編集後記〉全国集会に向けてのレジメ

号です。今回は四国支部でも大会資料をご
用意くださいますので、「木の目草の芽」
は支部報告がメインとなっています。
支部のみならず、報告原稿を今年もあり
がとうございました。 元川